

TRINC社長 高柳真さん

技術者の世界観を一変

「恩師」ハーマン氏に感銘

「静電気とホコリ」に起因する不良対策の装置・設備を開発・販売しているTRINC(トリंक)。トヨタ自動車をはじめ、自動車や家電などの有力メーカーに豊富な導入実績を持ち、二〇〇六年には経済産業省から「日本の明日を支える」元気なモノ作り中小企業300社「」に認定されるなど、力強い成長をつづけている。創業者の高柳真社長が、技術者としての世界観に大きな影響を受け、今も「恩師」と仰ぐのが、米国の技術コンサルタントのロイ・L・ハーマン氏だ。

(浜松)

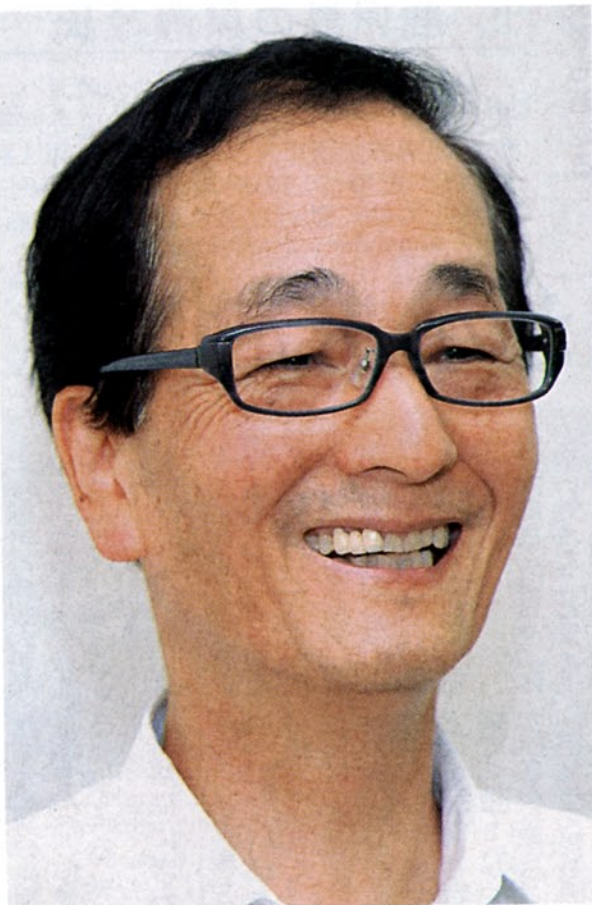
出会い
その時

●高柳さんがハーマン氏と出会ったのは、ヤマハ発動機の社員だった一九七七年。ハーマン氏は、ヤマハの生産管理システム構築プロジェクトパイは、部品など外注案件

人間行動を論理体系化

ロジェクトへの協力を依頼され、米国のコンサルティング会社から派遣されてきた。彼らは、コンサルティング会社のコンサルタントという立場。会社から先方に支払う月額報酬は、当時の我々の月給の十五倍と聞いて驚いたが、それほどの人物だった。生産管理システムは、のちにPYMAC(ピ

●八一年に完成し、コンピュータによる生産管理の先駆けともなったPYM



「私のTRINCにおける総仕上げとして欧州進出する際も、ハーマン氏にコンサルティングをお願いしたい」と信頼を寄せる高柳さん

ひと言

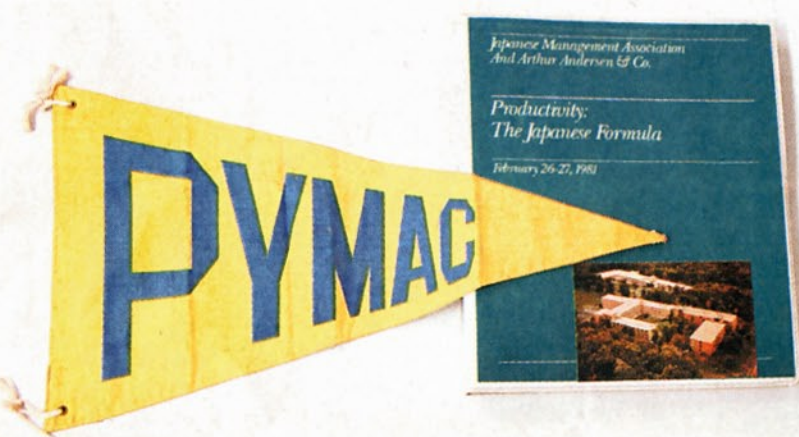
アメリカでは、人間の行動の世界も論理体系化されているとは、本当にびっくりであった。

プロフィール

たかやなぎ・まこと
1944年(昭和19年)1月
生まれ、64歳。68年静岡

大学大学院修士課程終了、同年ヤマハ発動機入社。他企業での勤務を経て、91年TTT(現TRINC)設立。浜松市出身。

ヤマハ発動機の共同で事業構築 生産管理システム



世界的な反響を呼んだ汎ヤマハ生産管理システム「PYMAC」(講演会で用いた旗と資料)

「衝撃的だったのは、それまで混沌としていた人間の行動を、コンピュータと協調できるほど論理体系化するノウハウ

無数の枝葉がわかれ、そつた周縁部ひとつひとつがまた、体系立ったシステムを備えている。早稲田大学の理工科出身で、電算室の課長だった先輩に説明したとき、「これだけで本を一冊書ける」と驚かれたことは、今でも覚えている」

●幼少のころからクラシ



高柳さんが恩師と仰ぐハーマン氏(左)

が、既に確立されていることだった。日本人の現場作業には、仕事の質を向上させるための自発的な努力を期待できるが、米国の低賃金労働者には、そうした向上心は期待できないケースが多い。だが、米国企業は、その点は早々と割り切った上で、本人の向上心に関係なくミスの削減、品質の向上が進むようなシステムを組み上げる。

ハーマン氏は私の目の前で、せつせと原稿を書きながら説明してくれ

AC。高柳さんはハーマン氏に会社の現状を伝え、ハーマン氏が設計した基本システムを会社に説明する役割だった。

計画」「所要量計画」「在庫管理」「技術情報管理」という、生産管理における四つの中心部分だけでなく、各項目から「工場管理」や「工場保全」など、

「雑多な演奏者たちが、指揮者のタクトの一振り、曲ごとに全く異なる世界観を、完璧な秩序のもとで表現していく。工業生産の世界で、同じような一糸乱れぬ人間行動を実現できる

「雑多な演奏者たちが、指揮者のタクトの一振り、曲ごとに全く異なる世界観を、完璧な秩序のもとで表現していく。工業生産の世界で、同じような一糸乱れぬ人間行動を実現できる」とは夢にも思っていなかった。当時の日本の製造業界は、「システム」という概念自体が一般的ではなく、従来の業務プロセスとあまりに異なる内容に、社内を説得することが困難だった。役員に、新しい発想に頭を切り替えてもらわないと会社が革新できないと訴え、「何様のつもりだ」と怒鳴られたこともある。

●こつとした困難を乗り越え、システムは完成。海外でも反響を呼んだが、そのことは同時に、高柳さんに会社を去る時期が来たことも感じ取らせた。

「米国や英国の生産管理協会の講演会で発表すると、大きな反響を呼んだ。出席していた日本能率協会の国際部長から、「日本は今まで、海外から技術や先進思想を導入し学んできたが、これが逆輸出元年になる」との賞賛の言葉もいただいた。だが、システムが完成したあとは、それを運用する人間が活躍する番。つくる側の人間である自分の役目は終わったな、と感じたとき、会社をやめることを決めた」

●ハーマン氏と共同で仕事をしたのは四年間だったが、その後も親交はつづいてい

「私の新築の家にも来て、娘を抱いてくれた。転職先の会社や、私が立ち上げた会社(TRINCの前身)にも来てくれたし、毎年クリスマスカードを送ってくれる。私も彼のシカゴの家を訪ねたし、自社製品の携帯FAXをプレゼントしたこともある。驚いたことに、今回の取材を受けるにあたり、ハーマン氏との写真を探していたとき、彼から二年ぶりの連絡が入ったんだ。『ずいぶん音沙汰がないが、元気にしているか?』とね。人の縁の不思議を感じたよ」